所以と必然

朱子の天理観再考

楊　立　華

【概要】旧来の朱子哲学における天理概念の研究にはすでに立ち入った、全面的な考察がある。しかし、天理概念に含まれる哲学的意義について、今だ曖昧で明らかではないところがある。本論は「所以」、「当然」、「必然」などの概念から着手し、精密なテキスト解釈や分析によって、天理の主宰と決定の意義の内実に定かな哲学的解釈を与えようとするものである。

【キーワード】朱子、理、天理観

はじめに

『四書或問』において、朱子はその窮める理を「当に然るべき所にして已む容からず、然る所以にして易ふ可からず」[1]と概括する。しかし、『朱子語類』巻十七にはまた「或るひと「格物」の章本と「然る所以の故」有りということを問ふ。曰く、「後来見得ん、且く当に然るべき所を見得んことを要す、是れ要切なる処なり。若し果して已む容からざる処を見得れば、則ち自ら黙会すべし」[2]と記されている。これによってわかるように、「当に然るべき所」の「已む容からず」ということには、すでに「然る所以にして易ふ可からず」という意味が含まれている。「答陳安卿」三（「泰伯篇」）において、陳淳の「『大学章句』『或問』論難する所以の処、惟だ専ら当然已む容からざるを以て言を為す、亦た此の意なり」という理解に対して、朱子は「『大学』本と更に「所以然」の一句有り、後来看得ん、且

[1] 朱杰人、厳佐之、劉永翔編『朱子全書』第 6 冊、上海古籍出版社、安徽教育出版社、2010 年、第 528 頁。
[2] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、中華書局、1986 年、第 384 頁。

く当に然るべき所を見得んことを要す、是れ要切なる処なり。若し果して已む容からざるところを得れば、即ち自ら黙会すべし」[3]と答えた。この問答は前に引用した『語類』の内容と基本的には一致する。「答陳安卿」三が 1191 年[4]に作られたことを考えると、この問答は『大学或問』の成立からすでに十数年を経ていることがわかる[5]。朱子のこの点に関する問題への思考はさらに一歩進んだと考えられる。

所以然、所当然、自然、必然などといった概念は朱子の天理観を理解するためのキーワードにほかならない。現代漢語のコンテクストに大きな変化があるのを考えて、これらの概念の朱子哲学のコンテクストにおける意義を新たに整理し、その中の古今の相違を考察することは、さらに立ち入って朱子の天理概念を的確に把握することに役立つと思う。

一、天運差有り

天の運行に差があるという問題への認識は明らかに暦法に関係がある。歴代が作る暦法の試みは天体の運行と完全に一致することに達することができない。これに対して、朱子はこのように述べる。

> 只だ季通説き得て好きこと有り、当初暦を造るときに、便ち合に天運蹉ふ所の度を并て都て算て裡に在き。幾年の後蹉んこと幾分、幾年の後蹉んこと幾度、這の蹉数を将て都て算て正数と做し、直に推して尽頭に到るべし。此の如くは庶幾くは暦以て正ふして差はざることを。今の人都て曽て箇の大統正を得ず、只管に天の運行差有りと説き、暦を造りて天に合せんことを求む。而して暦愈いよ差ふ。元と知らず、天如何ぞ差有る会きかを。自ら是れ天の運行合当に此の如くなるべし。此の説極めて是なり。知らず、当初甚に因り

[3] 朱杰人、厳佐之、劉永翔編『朱子全書』第 23 册、第 2737 頁。
[4] 陳来『朱子書信編年考証』、生活·読書·新知三聯書店、2007 年、第 344 頁。
[5] 『大学或問』の成立時間は『論語或問』と『孟子或問』とのそれとはほぼ変わらない。『朱子全書』第 6 册、第 492 頁を参照。

てか曽て算て裏に在らざることを。[6]

ここで注意すべきは、「天運差有り」ということが「天の運行合当に此の如くなるべし」とされていることである。換言すれば、天行の差は天理に符合する。朱子の蔡元定の歴法に対する観点への評価について、『朱子語類』にある記載はこれとは正反対のことを言っている。

> 季通嘗て言ふ、「天運常無し。日月星辰積気は、皆動物也。其の行度疾速にして、或は過不及、自ら是れ斉からず。我が法をして能く天に運ばしめて、天の運ふ所と為らざれば、則ち其の疎密遅速、或は過不及の間、我に出でず。此の虚寛の大数縦ひ差忒有れども、皆な推して失せざるべし。何者。我が法の定まり有るを以て彼の定まり無きことを律せば、自ずから差無き也」と。季通の言是に非ず。天運定まり無ければ、乃ち其の行度此の如し。其の行の差ふ処も亦た是れ常度なり。但し後の暦を造る者は、其の数為ること窄狭にして、以て之を包るに足らざるなり。[7]

前の引用文との違いは、朱子が明確に蔡元定への批評を示したところにある。しかし、精密に比較すればわかるように、両者の基本的な思想はほぼ一致している。第一に、天の運行には差があるということ、第二に、天行の差にはおのずからその常度がある。天運の差には常度がある以上、暦を作るときこの常度を計算に入れることは当然であり、これによって天体の運行と相一致するはずである。しかし、朱子はまた明確に「後の暦を造る者」の問題は「数為ること窄狭」という点にあることを示した。「闊」と「窄」の問題について、朱子はかつて立ち入った議論を行った。

> 或るひと問ふ、「康節何を以てか暦を造らざるか」と。曰く、「他安そ肯て此

[6] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 2213 頁。
[7] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 25 頁。

れを為んや。古人の暦法疏闊にして差ふこと少なし。今の暦愈いよ密にして愈いよ差ふ」と。因て両手を以て卓辺を量りて云う、「且く這の許多闊き、分て四段と作すか、他に界限せられて闊なれは、便ち差有り。只だ一段の界限の内に在るに過ぎず。縦ひ極めて差ひて二三段を出でしめども、亦た只だ此の四界の内に在り。所以に容易に推測すれば、便ち差有ること容易に見ゆ。今の暦法這の四界の内に於て八界と作し、這の八界の内に於て十六界と作す。界限愈いよ密なれば、則ち差数愈いよ遠し。何故そ。界限密にして逾越すること多きを以て也。」[8]

ここの議論からわかるように、朱子はこの誤差は予め確定された限界内にある以上、天行の差を完全に正確に計算することができないと考えている。このようにするメリットは推測しやすいことにあり、またその違いもはっきりと見えるからである。天の運行は完全に正確に計算できない以上、根本から言えば、定かではない。朱子が蔡元定の「天運常無し」という言い方に完全に賛同できないのは、おそらく天の運行の確定さはいかに人間の社会生活に重要であるのかということを考慮したからであろう。容易く「天運定まり無し」と強調したら、根本から人間の生活経験における最も確定性を持つものを揺さぶる可能性がある。したがって、一方では天の運行は定かではないことを知る必要があるが、他方ではまたその差異における「常度」を知る必要がある。実際、天の運行はすでに大化流行の全体にあり、その「定まり無し」もまた当然である。次の引用文を見てみよう。

問ふ、「地何故にか差ひ有るや」と。曰く、「想ふに是れ天運差ひ有り、地天に随て転て差ふ。今此に坐して、但だ知の動かざることを知るのみ。安んぞ天外に運て地之に随て以て転らざるを知るや。天運の差ひ、古今昏旦中星の同からざるが如し、是れ也。」[9]

---

[8] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2213 頁。
[9] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2212 頁。

朱子は地は動かないものだと思っていない。地は天にしたがって回っているが、ただ人間は地上にいるため、その運動を察知することができないだけである。天行に差があるため、地にも差があるのである。

二、不斉

終始、陰陽の相互作用にある実在の世界には、おのずからさまざまな「不斉」のものがある。これに関して次の引用文を見てみよう。

> 又た問ふ、「一陰一陽、宜く若し停匀せは、則ち賢不肖宜く均せるべし。何故にか君子常に少なくして、小人常に多きや」と。曰く、「自ら是れ他那の物事駁雑なれば、如何ぞ斉しきを得んや。且つ銭を撲つを以て之を譬ふ。純なる者は常に少なく、不純なる者は常に多し。自ら是れ他那の気駁雑にして、或は前或は後、所以に以て他恰好を得ること能はず。如何そ均平を得んや。且く一日を以て之を言ふ、「或は陰り或は晴れ、或は風ふき或は雨あり、或は寒く或は熱く、或は清爽或は鶻突たり。一日の間自ら許多の変有り。便ち見つべし。」と。又た問ふ、「是れ駁雑と雖も、然れども畢竟只だ是れ一陰一陽の二気に過ぎざるのみ。如何そ恁地に斉からざることを会するや」と。曰く、「便ち是れ此の如くならず。若し只だ両個単底の陰陽ならば、則ち斉しからざること無し。是れ他那の物事錯揉万変するに縁りて、所以に他恰好を得ること能はず。」[10]

もし天地の間にあるのがただ「両個単底の陰陽」のみであれば、たとえ相互作用や感応があったとしても、決して斉しくならないものを生み出さない。しかし、天道は生々としてやまないため、陰と陽とは常に相互転化の中にあり、陽が動いたら必ず陰の静かなることを生み、陰の静かなることはまた陽が動くことを感応するのである。尽きることのない、日々新たになる陰陽の両体は「錯揉万変」に

[10] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 79-80 頁。

して、完全に「恰好」な物事があるはずはない。

気の世界にある「斉しくならない」物事はあらゆる面での体現を持っている。むろん、最も顕著な表現は徳と福の間における不一致にあるに違いない。これについて次の引用を見てみよう。

> 問ふ、「夫子南宮適の問に答えざるは、深意有るに似たり」と。曰く、「如何そ」と。過て謂ふ、「禹稷の天下を有ち、羿奡其の死を得ざること、固より是れ此の如し。亦た徳禹稷の如くして天下を有たざる者有り。孔子の終身旅人為る是れ也。亦た悪羿奡の如くして其の終を得る者有り。盗跖牖下に老死する是れ也。凡そ事之に応ずれば必然に時有りて或は然らず。惟だ夫子の聖、能く答ざる所以なり。君子の心、亦た其の為すべき所を為して其の效の彼に在ることを許らず」と。（蜀録に云う、「必然の中、或は然らざる者の存すること有り。学者の心、惟だ善を為すことを知るのみ。他は計らざる也。夫子答ざるは、固より深意有り。聖人に非ざれば是の如きこと能はず」と。）曰く、「此の意思較好し」と。[11]

「必然の中、或は然らざる者の存すること有り」というのは朱子本人の言葉ではなく、その弟子の王過の体験である。朱子の反応を見ればわかるように、彼は王過の観点に賛同する。ここでいう「凡そ事之に応すれは必然に時有りて或は然らず」は、道学の言葉における「必然」と今日われわれが説いている客観的な規律の必然との間に違いがあることを示している。一物があれば必ずそれにかかわる一物を生み出したり、あるいはこのことをやれば必ずある結果を生み出したりするというような必然は、宋の道学の世界観に存在していなかった。現代の自然科学の決定的な影響は根本から現代人の世界観を支配している。自然科学の規律は一般的に必然の鉄則と見なされているが、実際、自然科学の規律の普遍性と必然性は理を考えるレベルにおいて真なる意味での証明を得ていない。

---

[11] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 1121-1122 頁。

三、所以と所以然

程子は「所以」を用いて形而上と形而下を強く区別した。それ以降、「所以」と「然る所以」は天理概念の基本的な内容をなしている。しかし、「所以」という言葉は朱子哲学の言語における具体的な意味では依然として曖昧模糊なところがあるように思われる。「所以」という言葉は朱子においては、大体三つの用法がある。その一、ある現象を引き出す原因として使われる。たとえば、「雪花必ず六出なる所以の者は、蓋し只だ是れ霰下にて、猛風に拍ち開かれ、故に六出と成る。人一団の爛泥を地に擲つが如し。泥必ず濺開して棱瓣を成す也。又た、六は陰数、太陰玄精石も亦た六棱なり。蓋し天地自然の数なり。」[12]その二、「…を用いてもって（用以）」、「…をもって…する（用来）」の意味として使われる。たとえば、「人常に書を読むは、庶幾くは以て此の心を管摂し、之をして常に存せしむべきことを。横渠言ること有り、「書は以て此の心を維持する所以なり。一時放下すれば、則ち一時徳性懈ること有り」と。其れ何ぞ廃すべき」[13]その三、決定するという意味として使われる。たとえば「耳目の視聴、視聴する所以の者は即ち其の心也。豈に形象有らんや。」[14]最後のこの用法は天理概念を理解するためのキーワードであるが、「決定」とはいかなる意味での「決定」であるのかは、深く考えることを待たなければならない。朱子においては、「然る所以」は基本的には知にかかわっている。

> 親に事ては当に孝なるべく、兄に事ては当に弟たるべしの類の如きは、便ち是れ当然の則なり。然らば親に事ふること如何ぞ却て須く孝を要し、兄に従ふこと如何ぞ却て須く弟を要するや。此れ即ち然る所以（所以然）の故なり。程子「天の高き所以、地の厚き所以」と云ふが如し。若し只だ天の高、地の厚のみを言へば、則ち是れ其の然る所以を論せず。[15]

---

[12] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 23 頁。
[13] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 176 頁。
[14] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 87 頁。
[15] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 414 頁。

この語録にある「所以然」とは、道徳規範の根拠と自然現象の原因を指しており、格物致知の目標である。朱子から見れば、道徳実践が実際のところにおいて行われうるのかは知の深さによって決定される。「所以然」の多くは道徳行為の背後にある根拠を指している。「所以然」は知の内容である以上、その中に天理に対する認識が含まれているが、厳格に言えば、天理は万物の然る所以であるとは言い難い。なぜなら、天理は人間の認識に頼っているわけではないからである。

「所以然」は「所以当然」として表されることもある。『論語』「五十にして天命を知る」を解釈するとき、朱子は「天命」と「事物の当に然るべき所以の故」として解釈している。彼はまたこのようにいう。「天の命ずる処、未だ人の性に在りて説くこと消ず。且つ是れ万物に付与すと説けば、乃ち是れ事物の当に然るべき所以の故（所以当然之故）なり。父の慈、子の孝の如きは、須らく父子只だ是れ一箇の人なることを知るべし。慈孝は是れ天の我に与る所以の者なり。」[16]ここで天の「付与」を強調している以上、「事物の当に然るべき所以の故」も普遍、決定の意味を帯びてくるのである。

四、当然と自然

朱子は「当然」を語るとき、常に「自然」に関連づけている。これに関しては次の引用からも明らかである。

> （炎が録に云ふ、「天下の事合に恁地なるべき処は、便ち是れ自然の理なり」と。）「老者之を安んずる」が如きは、是れ他自ら安の理を帯び得来る。「朋友之を信ず」は、是れ他自ら信の理を帯び得来る。「少者之を懐く」は、是れ他自ら懐の理を帯び得来る。聖人之を為すこと、初より形跡無し。季路顔淵は便ち先づ自身有り了て、方に做し去。牛の鼻を穿ち、馬の首を絡ふが如きは、都て是れ天理此の如し。恰も他生れ下て便ち自ら此の理を帯び得来る

[16] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 552 頁。

に似たり。」[17]

「合に恁地なるべき処」は「当然」のことを指している。天下の事の「当然」は「自然の理」の体現である。「牛の鼻を穿ち、馬の首を絡ふ」は牛や馬を扱う「当然」であり、同時に牛、馬の「自然」である。「自然」はまた「必然」の意味がある。

（砺か録に云ふ、「畢竟是れ陽長すること、次を将て並進す」と。）以て極に至れば、則ち朋友来るの道有りて咎無き也。「反復其れ道あり。七日にして来復するは、天行也」、消長の道自然に此の如し。故に「天行」と曰ふ。陰の極まる処、乱る者は復た治り、往し者は復た還り、凶なる者は復た吉たり、危き者は復た安し。天地自然の運也。」[18]

朱子哲学において、陰陽の消長はもっともわれわれの今日的意義での客観的必然性を持っている。そのため、ここでいう「自然」は極めて特別に際立った必然の意味を持っている。のちの検討ではこれにかかわるさらなる探究が行われる。『周易・節卦・象伝』における「天地節而四時成」に対して、朱子には特に注意に値する解釈がある。

天地転じ来て、這裏に到て相節し了て、更に去る処没し。今年冬尽了れば、明年又た是れ春夏秋冬、這裏に到て断匝り了りて、更に去ることを得ず。這個折て両截と做し、両截又た折て四截と做す。便ち是れ春夏秋冬なり。他是れ自然の節なり。初より人の他を使ふこと無し。聖人は則ち其の自然の節に因りて之を節す。「道を修る之を教と謂ふ」「天有礼を秩る」の類の如きは、皆是なり。天地は則ち這個を和せて都て無し。只だ是れ自然に此の如し。[19]

---

[17] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 757 頁。
[18] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 1789 頁。
[19] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 1866 頁。

「這裏に到て斷匝り了る」とは、一つの往復循環の中に入ることをいうのである。「更に去ることを得ず」という言い方は朱子が無極、太極の「極」を論ずるときの話と基本的には一致している。「無極の真は是れ静動を包て言ひ、未発の中は只だ静を以て言ふ。無極は只だ是れ極至、更に去る処無く了る。至高至妙、至精至神、更に去る処没し。濂溪人太極形有りと道んことを恐る。故に曰く、「無極にして太極」と。是れ無の中箇の至極の理有り。「皇極」の如きも、亦た是れ天下に中して立つ。四方輻湊して、更に去る処没し。這辺に移過するも也た是ならず。那辺に移過するも也た是ならず。只だ中央に在りて、四畔合湊して這裏に到る。」[20]天の運行の循環における「更去不得」は太極、無極の「極」の「更没去処」と同じすべて「自然」である。ここでいう「自然」はいうまでもなくさらに必然の意味を持つ。朱子は「自然の節」は「人の他を使ふこと無し」であると強調する以上、「自然」は自然と別の要素によって支配されたり影響されたりすることのない意味を持っている。これはわれわれが朱子哲学における必然と支配の意味を理解するのに役立つと思う。朱子は弟子たちとの討論においては、時々「合当に此の如くなるべし」という表現をもって「当然」を説いている。

> 道夫言ふ、「向きに先生天地の有心無心を思量することを教ふ。近ころ之を思て、窃に謂ふ、天地無心にして、仁は便ち是れ天地の心なりと。若し其れをして心あらしめれば、必ず思慮あり、営為あらん。天地曷そ嘗て思慮有らんや。然れども其の「四時行れ、百物生る」所以の者は、蓋し其の合当に此の如くなるべくして、此の如し。思惟することを待たず。此れ天地の道為る所以也。」[21]

この話は朱子の弟子である楊道夫が説いたものである。朱子の答えから見れば、朱子はただその中にある「天地無心」という言い方に保留を持っているのみであ

---

[20] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2369 頁。
[21] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 4 頁。

る。「四時行、百物生」は天道の必然に過ぎないにもかかわらず、楊道夫はかえってそれを「合当に此の如くなるべし」と理解している。これによってわかるように、「当然」にも必然の意味がある。

五、不容已と必然

朱子のいう「不容已」には、おおむね次の二つの含意がある。第一に、そのようにしないことはあってはならないという意味であり、第二に天運自然という意味でそうでないことがありえないものである。後者の方がより哲学的な意義を持っている。

> 問ふ、「『或問』云ふ、「天地鬼神の変、鳥獣草木の宜、以て其の当に然るべき所を見ること有らざるなくして已む容からず」と。所謂「已む容からず」是れ如何」と。曰く、「春生し了れば便ち秋す。他住ることを得ず。陰極まり了れば、陽便ち生ず。人の背後に在りて只管に来て相趲ふが如し。如何そ住め得ん。」[22]

ここでの「不容已」は極めて明確に必然の含意を持っている。このような必然という意味での「不容已」は、朱子が歴史における理勢を論じる際には「自然」や「必然」などの概念と完全に等しいものとして扱われる。

> 問ふ、「其の闕る所の者は、宜く益すべし。其の多き所の者は宜く損すべし。固に事勢の必然なり。但し聖人此処に於て恰好を得たり。其他の人は則ち損益過差し了る」と。曰く、「聖人は便ち措置して一一に理に中る。周末の如きは文極めて盛んなり。故に秦興れば必ず降殺して了る。周恁地に柔弱なり。故に秦必ず変して強戻を為す。周恁地に纖悉周緻なり。故に秦興て、一向に簡易無情にして直情経行なり。皆な事勢の必変なり。但し、秦変り得て過ぎ

---

[22] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 413-414 頁。

了る。秦既に恁地に暴虐なり。漢興て定めて是れ寛大なり。故に云ふ「独り沛公素より寛大の長者なり」と。秦既に封建の弊を鑑み、改て郡県と為す。其の宗族、一斉に削弱と雖も、漢に至て遂に大に同族を封す。制に過ぎざることなし。賈誼已に其の害を慮り、晁錯遂に削ること一番、主父偃遂に誼が説を以て之を武帝に施し、諸侯王只管に削弱す。武帝より以下、直に魏末に至まて、宗室を凛削するに非ざるなし。此に至りて極れりと謂ふべし。晋武起て、尽く宗室を用ふ。皆な是れ其の事勢に因りて、然らざるを得ざるなり。」賀孫問ふ、「本朝の大勢是れ如何」と。曰く、「本朝五代藩鎮の兵を監れば也た収め了る。賞罰刑政、一切都て収め了る。然ども州郡一斉に困弱す。靖康の禍、寇盗の過る所、潰散せざることなし。亦た是れ斟酌を失うこと致る所なり。又た熙寧変法の如きも、亦た是れ苟且も情弛の余に当る。勢已む容からざる者有り。但し、之を変すること自ら道に中らず」と。[23]

又問ふ、「韓柳二家、文体孰れか正しき」と。曰く、「柳文も亦た自ら高古なり。但し甚だ醇正ならず」と。又問ふ、「子厚封建を論ず、是か否か」と。曰く、「子厚説く、「封建は聖人の意に非ざる也、勢也」と。亦た是なり。但し、説て後面に到て偏処有り。後人之を辨ずる者も亦た之を大過に失す。廖氏封建を論ずる所の如きは、子厚を排すること太過なり。且つ封建は古より便ち有り。聖人但だ自然の理勢に因りて之を封ず。乃ち聖人の公心見るべし。且つ周封康叔の類の如きも亦た之古より此の制有り。其の功有り、徳有り、親有るに因りて、当に封ずべくして之を封ずるは、却て是れ聖人已むを得ざるところにあらざるなり。若し子厚の説く所の如ければ、乃ち是れ聖人之を呑んと欲して得べからず。乃ち奈何ともすべきこと無くして之を為すなり。知らず、所謂勢は乃ち自然の理勢なり。已むを得ざるの勢に非ざるなり」と。[24]

ここで特に注目すべきは、「然らざるを得ざる」「事勢」や「自然の理勢」とい

[23] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 599 頁。
[24] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 3303 頁。

った言葉と「不得已の勢」という言葉との区別である。「不得已」と「無可奈何」には、「したいができない、したくないがせざるを得ない」といった受動的な意味がある。これが受動的であるというのは、単に歴史の趨勢が止めることのできないものであるということだけを捉えて、その中にある義理の当然ということに気づかないからである。「然らざるを得ず」の方は、真に歴史の趨勢の中に「当然」を見出す。封建制を例に取れば、それは当時の情勢の下で「功有る」者・「徳有る」者・「親有る」者に与えられるべき徳義であり、単に力が及ばないからとか世の中を治めるためにやむをえずそうする訳ではない。周末になって文化が栄え柔弱であったのが、変じて強く簡素な秦になり、秦の暴虐が漢の寛大となったのは、「極まれば必ず反す」という必然の理の体現である。ここまで来ると、「更に去ることを得」ないため、逆方向へ転じるしかない。

各種の「不斉」に満ちた気の世界においては、陰陽の間の循環消長は「天生自然の鉄定」である。天理はこの「一陰一陽循環して已まざる」「所以」である。

> 問う、「屈伸往来は、気也。程子の「只だ是れ理」と云ふは何ぞや」と。曰く、「其の屈伸往来する所以の者は、是れ理必ず此の如し。「一陰一陽之を道と謂ふ。」陰陽は気也。其の一陰一陽循環して已まざる者は、乃ち道也」と。[25]

> 「一陰一陽之を道と謂ふ」。陰陽は是れ気、是れ道ならず。陰陽為る所以の者、乃ち道也。若し只だ「陰陽之を道と謂ふ」と言へば、則ち陰陽是れ道なり。今「一陰一陽」と曰へば、則ち是れ循環する所以の者、乃ち道也。「一闔一闢之を変と謂ふ」も、亦た然り。[26]

朱子哲学における「所以」という言葉のいくつかの含意についてはすでに分析した。ここでの「所以」はおそらく決定の意味だろう。朱子は『易伝』が「陰陽

---

[25] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2437-2438 頁。
[26] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 1896 頁。

之れを道と謂ふ」ではなく、「一陰一陽之を道と謂ふ」と言っていることを強調している。形而上者としての道や理は一陰一陽循環して已ずという在り方を決定する者であり、主宰するものである。さらに歩を進めて考えるべきは、ここでの決定や主宰ということがどのような意味であるかということである。理はどのように気の流行を決定し主宰するのだろうか。

六、主宰

これまでの考察において、朱子が天理の本質に関連するものとして論じている概念について見て来た。「当然」「自然」「必然」「所以」は多くの状況において互いに同じ意味で用いられており、「已む容からず」や「ざるを得ず」といった表現と関連するものとして用いられていた。そして、このような意味での必然は、我々が現在通常用いる客観的な規律という意味での必然とは異なっている。

> 問う、「「道は離るべからず」は只だ我這の道を離るべからざることを言ふや、亦た還て是れ離ること能はざるの意思有るや、否や」と。曰く、「道は是れ離ること能はず。純ら是れ離ること能はざるを説く。錯行も也た是道と成さず。」と。[27]

道は自動で実現される客観的な必然ではない。もし客観的な規律という意味での必然であれば、そもそもそれが実現するかどうかということを問題にする必要はない。朱子がいう「離ること能はず」とは、逃れることのできない形式や傾向という意味においてのみ理解することができる。

> 問う、「「視聴、思慮、動作は皆な天也。人但だ中に於て真と妄とを識得せんことを要するのみ。」真、妄是は是れ那の発する処に於て天理人欲の分を識得せんことを別る。如何」と。曰く、「皆な天也と言ふは視聴、思慮、動作

[27] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 1498 頁。

> 皆な是れ天理なり。其の順に発出し来るは、当然の理にあらざることなければ、即ち所謂真なり。其の妄なる者は、却て是れ天理に反する者也。是れ妄なりと雖も、亦た天理にあらざる無し。只だ是れ発し得て地頭に当らず。譬ば一草木の合に山上に在る如き、此れは是れ本分なり。今却て移て水中に在り。其の草木為ること固に以て異なることなし。只だ是れ那の地頭是ならず。恰も「善は固に性也。悪も亦た之を性と謂はざるべからず」の意の如し」と。[28]

「妄なる者」もまた自然の傾向の体現であり、当然の形式を備えている。ただそれが不適当な発現しているだけである。羞悪すべき時に全く羞悪の心がなく、羞悪すべきでないときに羞悪してしまうことがある。道を行おうと思っているのに、衣服や食べ物が劣悪であることを恥だと思ってしまうような場合である。羞悪の心は人間の普遍的な自然傾向であり、善の具体的な形式の一つであるが、間違った形で発現すると悪になってしまう。

「必然」に対するこのような理解に基づけば、朱子の言う「主宰」の意味についてより深く検討することができる。

> 「密を窺はざる」より「未だ至らざるを測ること無し」に止る。曰く、「許多の事都な是れ一箇の心なり。若し此の心誠実にして欺偽無きことを見得れば、方に始て能く此の如くなるべし。心苟も渙散して主無ければ、則ち心皆な他を逐て去り了る。更に一箇の主無し。此れを観れば、則ち放心を求る処、全く許多の事の上に在り。許多の事を将て此の心を攔截し去て定まら教む。」[29]

「主」は他者の影響によって左右されないことであり、「定」という意味である。そして「定」は「不易」であり、自身の同一性を保つということである。しかし、

[28] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2452 頁。
[29] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2249 頁。

「定」や「不易」は硬直した無変化の状態ではなく、変化の中において恒常的であるということである。朱子は「恒」卦について次のように述べている。

「恒」は一定の謂に非ず。故に昼なれば則ち必ず夜、夜にして復た昼。寒ければ即ち必ず暑、暑にして復た寒。若し一定なれば、則ち常なること能はざる也。其れ人に在て「冬日は則ち湯を飲み、夏日は則ち水を飲む」、「以て仕ふべけれらば則ち仕へ、以て止むべければ則ち止む」。今日道合ふときは便ち従ひ、明日合はざれば則ち去る。又た孟子斉王の金を辞して薛宋の餽を受るが如きも、皆な時に随て変易す。故に以て常と為すべき也。[30]

恒常は変易を貫通する。あるいは、同一性は差異の不断の作用と生成を貫通するものである。普遍的で必然的な同一性は、不断に生み出される差異の影響によって左右されることはない。

七、理・神・一

朱子の哲学において、理は主宰者である。

問ふ、「天地の心、天地の理。理は是れ道理、心は是れ主宰の意なるや、否や」と。曰く、「心は固に是れ主宰の意なり。然ども所謂主宰なる者は、即ち是れ理也。是れ心の外に別に箇の理有り、理の外に別に箇の心有るにあらず」と。[31]

問ふ、「是の理有りて後に是の気有り。未だ人有ざる時、此の理何にか在るや」と。曰く、「也た只だ這裏に在り。一海水の如きは、或は一勺に取得、或は一担に取得、或は一碗に取得、都て是れ這の海水なり。但だ是れ他は主

[30] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 1821 頁。
[31] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 4 頁。

と為て、我は客と為る。他は較や長久にして、我は之を得ること久しからざるのみ」と。[32]

天あるいは理と人間の関係において、人間は受動的である。この受動性は根本的には天の人間に対する「付与」に由来する。朱子にとっては、天や理が主宰であり、能動であり、恒久であることは疑いの余地のない確定した事柄である。理と神は同じ次元に属する概念である。もちろん、ここでの神は「鬼神」という意味での神ではない。

問う、「所謂神なる者は、是れ天地の造化なるや、否や」と。曰く、「神は、即ち此の理也。」[33]

理は形而上者であり、「動きて動くことなく、静かにして静かなることな」いものである。「理は神にして測ること莫し。其の動く時に方て、未だ嘗て静かならず。故に曰く「無動」。其の静かなる時に方て、未だ嘗て動かず。故に曰く「無静」」[34]神は万物よりも妙である。昼夜や陰陽もすべて神によって変わり、神は昼夜や陰陽によって変えられることはない。

「動きて動くことなく、静かにして静かなることなし」を問ふ。曰く、「此れ説は「動きて陽を生じ、動くこと極りて静なり。静かにして陰を生じ、静かなること極りて復た動く」。此れ自ら箇の神其の間に在て、陰に属せず、陽に属せず。故に曰く、「陰陽不測之を神と謂ふ」と。且つ昼は動き夜は静かなるが如きは、昼間に在て神之と倶に動かず。夜間に在て神之と倶に静かならず。神は又た自ら是れ神なり。神却て昼夜を変じ得て、昼夜却て神を変じ得ず。神は万物に妙なり。「水は陰にして陽に根差し、火は陽にして陰に

---

[32] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2 頁。
[33] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2404 頁。
[34] [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 2403 頁。

根ざす」と説くが如きは、已に是れ形象有り、是れ粗底を説き了る」と。[35]

神は昼夜によって変わることなく、終始一である。「神又た自ら是れ神」と言われるように、神は一切の対立する二つの物を貫通し、常にそれ自体としては同一である。朱子は張載の「一物両体」を称賛し、「「神化」の二字、程子説き得たりと雖も、甚だ分明ならず。惟だ是れ横渠推出し来る」と述べている。そして、張載の「一なるが故に神なり、両なるが故に化す」について次のように説明している。

> 両は一を推し行ふ所以也。張子言ふ、「一なるが故に神なり。両在るが故に不測なり。両なるが故に化し、一を推し行ふ」と。此の両在るが故に一存すと謂ふなり。「両立たざれば、則ち一見るべからず。一見るべからざれば、則ち両の用或は息むに幾し」も亦た此の意なり。事先後有り、才に先有れば、便ち末後の一段に思量し到れるが如し。寒なるときは、則ち暑便ち其の中に在り。昼なるときは、則ち夜便ち其の中に在り。便ち一有りて寓す。[36]

「先」は自らの同一性の中にすでに「後」を包含している。「寒」は自らの同一性の中にすでに「暑」を包含している。一切の差異はすべて対立する二つのものの体現であり、対立する二つのものはそれぞれの同一性の中に、必ずすでにもう片方を包含している。「一」は相互に依存し相互に作用する二つのものの外にある「一」ではない。無分別の「一」は常に無分別の硬直した状態の中にしかあることができず、このような「一」は存在しない。「一」はあくまで対立する二つのもののそれぞれの同一性である。そして、二つのもののどちらの同一性も、同時に対立する他方の存在を意味する。「陰中陽有り。陽中陰有り。陽極まりて陰を生じ、陰極まりて陽を生ず。所以に神化窮り無し。」[37]

---

[35] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 2403 頁。
[36] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 2512 頁。
[37] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 2511 頁。

動静・陰陽には始まりがない。そのため程子は「動静端無く、陰陽始まり無し」と述べた。これに対して、朱子は明確に次のように述べている。「這れ箇の始め説道すべからず。他那の始め有るの前、畢竟是れ箇の甚麼ぞ。他自ら是れ一番の天地を做し了る。壊れ了りて後、又た恁地く做し起き来る。那箇甚の窮尽有らん。」[38]有形の物は、仮に天地のように大きなものであってもいつか壊滅する。しかし、壊滅は一切の対立や差別の消失ではない。そのため、朱子は「天地始初混沌未分の時、想に只だ水火の二者有り」と言っている。[39]ここでの「火水」は、おそらく陰陽のことを指している。陰の中に陽を含んだものが水の象であり、陽の中に陰を含んだものが火の象であるからである。無窮無尽の大化流行は、相互に依存する対立する二つのものの相互作用と転化の体現に過ぎない。しかし、二つのものの「立」もまた各自の同一性の体現である。「凡そ天下の事、一にしては化すこと能はず。惟だ両にして後能く化す。且く一陰一陽の如きは、始て能く万物を化生す。是れ両箇と雖も、之を要するに亦た是れ此の一を推し行ふのみ。」[40]

陽自身の同一性のためには陰が条件となるのであり、逆もまた然りである。そのため、対立する二つのもののそれぞれの同一性は、対立する一方の同一性の根本でもある。対立する二つのものが構成する無限の差異が「一を推し行ふ」のである。無限の差異のそれぞれの同一性が互いに感応したり作用したりすることによって、無限に変化する「不斉」の世間万有が産出される。天理はそれと別のものではなく、対立する二つのものおよび二つのものによって構成される無限の差異を持った「一」の中に遍在している。そのため、朱子は「若し理は、則ち只だ是れ箇の淨潔空闊の世界にして、形跡無ければ、他却て造作すべからず。気は則ち能く醞醸凝聚して物を生す也。」[41]と説いている。ここでの「淨潔空闊」は、純粋で混ざり気がないという意味である。理はそれとして別にあるのではなく、万物に「分付」し万物を「主宰」するものである。理は一切の差異と存在の同一性に他ならない。現実の世界は万変「不斉」であるが、全体としてみれば自ずから

[38] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 2377 頁。
[39] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 2512 頁。
[40] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 7 頁。
[41] [宋]黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』、第 3 頁。

その「定」まるところがある。「若し果て心なければ、則ち須く牛馬を生み出し、桃樹の上に李花を発すべし。他又た却て自ら定まる」[42]この「定」まるところこそが、全ての存在のそれぞれの同一性の体現である。

八、結論

朱子の形而上学の思想が程子や周子に淵源を持つことは、これまでの研究においてすでに注目されてきた。しかし、朱子が張載の本体論から受けた影響は、あるいは理本と気本との硬直した区別にとらわれていたということで、十分に重視されて来なかった。張載の本体論の構築に対して、朱子は一方では程子の「清虚一大」に対する批判を継承しながら、他方では「一物両体」の思想を創造的に深く解釈し発展させた。そして、この深化・発展は朱子の天理観の形成に対して、根本的な影響を与えている。

これまでの分析をまとめれば、次のような結論を導き出すことができる。第一に、朱子の哲学において、気の世界内における具体的な存在の間には明確で必然的な規律は存在しない。換言すれば、気の世界は根本的に「不斉」である。第二に、対立する両体（陰陽・静動など）の間の消長や転化の必然性は、その実理の必然性の体現に他ならない。消長・転化は永恒で必然のものであるが、その具体的な過程は偶然で確定したものではない。第三に、天理は形而上者として、一切の次元の存在と一切の存在の次元に同一の傾向である。一切の対立する両体のどちらも自身の同一性を維持しようとすると同時に、その対立者の同一性も維持しようとする。このような意味において、同一と差異とは相互に条件となっている。それによってもたらされる大化流行の統体によってこそ、その変化と生生の同一性が維持され、永恒の変化と已まざる生生が可能になる。天理は「潔浄空闊」の「一」である。この「一」は一切の差異と変化の中に遍在する。一切の差異と変化は「一」の推行であり実現である。天理の主宰ということの意味と決定ということの意味はここにこそある。「所以」「当然」「必然」の根本的な意味もまたここ

42 [宋]黎靖德編、王星賢点校『朱子語類』、第 4 頁。

にこそあるのである。

※本稿は楊立華「所以与必然：朱子天理観的再思考」『深圳社会科学』2019 年第 1 期の翻訳である。
※漢文の引用は訳者の手で書き下しにした。また、その際に『和刻本　朱子語類大全』を参照した。

（廖欽彬・河合一樹訳）

（よう　りつか
北京大学哲学系教授）